オンライン環境におけるプロジェクト学習の試み

冨 永　祐 子

要旨

本稿は，2021 年度活水女子大学オンライン夏期短期研修の実践報告である。2021 年度はコロナ禍という状況から，オンライン環境で実施した。本研修は，オンライン授業と交流の 2 本の柱により構成した。本稿はそのなかのオンライン授業で行なった活動について報告する。

キーワード

プロジェクト学習 (1)　課題解決力　論理的思考力　オンライン環境　ICT

1. はじめに

本稿は，2021 年 7 月に実施した 2021 年度活水女子大学オンライン夏期短期研修におけるオンライン授業の実践内容を報告するものである。本学では，毎年初夏に夏期短期研修として約 2 週間の日本語研修を行っている。2021 年度は新たな試みとして，ICT を活用し，オンライン環境で夏期短期研修を行った。研修は，オンライン授業と在学生（以下バディ (2)）との交流の 2 本の柱により構成した。本稿はそのなかのオンライン授業で行なった活動について報告する。

1.1　実践の背景

本学では，毎年初夏に約 2 週間，夏期短期研修を対面で行なっている。しかしながら，2021 年度は，コロナウィルス感染症の影響により，参加者の入国が困難な状況にあった。そこで，新たな試みとして ICT を使い，オンライン環境で研修を実施した。

今年度の研修の目的は，以下の 2 点であった。1）今まで学んだ日本語を運用すること，2）実際に運用することより，研修参加者が自らの日本語能力について考えること，であった。そして，研修への参加をとおして参加者自身が日本語の力を見つめなおし，今後の日本語学習の課題を見つけることを研修全体のゴールとして設定した。

研修は，オンライン授業とバディとの交流の 2 本の柱により構成した。オンライン授業では，身近な社会問題について理解を深め，実現可能な対応策を検討し提案することをとおして，「読む」「書く」「聞く」「話す」の 4 技能の運用の機会を提供することを目指した。また，社会問題を自分ごととして捉え，学生の立場でできる対応策を検討することで，より実践的な課題解決力の向上を期待した。さらに活動のなかで，自分の考えをまとめたり，他者に説明することにより，論理的思考力の向上も期待した。そのためにプロジェクト学習の手法を用いた。

交流には，担当教師は介入せず，バディと研修参加者が活動内容を相談の上決定し，行われた。オンライン授業と交流をとおして，教室内外で日本語が運用され，参加者自身が自分の日本語力を見つめなおすことが期待された。なお，交流については，稿をあらためて報告する。

2. オンライン授業の概要

本研修は，7 月 5 日（月）～7 月 31 日（土）約 4 週間であった。全 24 回行われ，3 つのセッションで構成された。授業形態は，リアルタイム（14 回），オンデマンド（4 回），グループセッション（6 回）で 1 回 45 分であった。参加者は 4 名で，国籍はタイ（3 名），韓国（1 名）であった。日本語学習歴は，1～8 年で，日本語力は初中級レベルであった。教員は 3 名（筆者含む）で，コース全体を分担して担当した。

各セッションのテーマと目的・内容は以下の通りである。

テーマ	目的・内容
セッション 1 「私ってこんな人」	・自分の興味関心がわかる写真を紹介することで，自分の人となりを知ってもらう
セッション 2 「朝ごはん色々」	・朝ごはんを紹介しあうことで，多様な生活習慣，好みがあることを知る ・〇〇人／〇〇国では類型化できない他の人との類似点，相違点を知る
セッション 3 「Z 世代は〇〇」	・興味・関心のある社会問題の「何が」「どうして」問題なのかを他の人にわかりやすく説明する ・上記の社会問題について「Z 世代」の考えを調べて，「Z 世代」にできることを提案する

セッション 1，2 は，参加者同士の関係性の構築と，ICT に慣れてもらうためのプレタスクとして，セッション 3 を，メインタスクという位置づけで行った。以下，セッション 3 について詳述する。

3. オンライン授業の内容

セッション 3 では，グループで一つのテーマを選定し，対応策を検討，提案することを目標とした。テーマは，参加者の出身地（国・地域）と日本の対照ではなく，世界共通の課題として考えられることを選ぶように指示した。グループ内で問題意識を共有し，対応策を考えることを意識してもらうために，参加者全員の共通点である「Z 世代」[(3)] を社会問題を調べる際のキーワードとした。また，公的な機関へ対応策を提案するのではなく，学生という立場でできる解決策を見出すことを目指すように指示した。大まかな流れは，以下のとおりである。

(1) 「Z 世代」が興味・関心を持っている社会問題は何かを調べ，課題を把握する
(2) (1) をもとにグループのメンバーに問題提起をする
(3) (2) の中から，グループで考えるテーマを選定する
(4) 課題を明確化するための調査を計画する
(5) アンケート調査をする

(6) 調査結果を集計・分析し，課題を抽出する
(7) (6) を解決するための具体的な方法をグループで検討する
(8) 実現可能な提案を PPT にまとめ，プレゼンテーションを行う

なお，(1) (2) は個人で (4) ～ (8) は協働で作業を行った。(1) では，各自が PPT に現状，課題をまとめた。(2) (3) では，ビデオ会議システム（以下 zoom）を使い，リアルタイムで報告，意見交換を行った。そして，グループで取り組むテーマを選定した。選定されたテーマは，「ネット中毒」であった。(4) では，課題を明確化するために Google フォームを使い，インターネット上で行うアンケートフォームを協働で作成した。(5) アンケート調査は，バディにメールで調査協力を依頼し，回答してもらった。(6) Google フォームで集計した結果を，協働で分析し，課題を抽出した。(7) 分析の結果をもとに，具体的な対応策を zoom で話し合った。(8) バディにメールでプレゼンテーションの案内を送り，参加表明をしたバディをまねき，協働活動の成果を発表するプレゼンテーションを zoom を使い，実施した。

4. 授業の工夫

課題解決力，論理的思考力の向上のため工夫した点を以下に述べる。

4.1「課題解決力」向上のための工夫

1) 一人作業と協働作業を繰り返す

参加者自身の問題意識を掘り下げるために，一人作業と協働作業を繰り返すように授業を設計した。例えば，一人作業では，各自が調べてまとめた。協働作業では，参加者一人一人が調べたことや考えを話しあった。これにより，自分自身の考えに向き合うとともにお互いの考えを知ることにより，多角的な視点から，課題に対する問題意識を掘り下げることを期待した。

2) 教師が介入しない時間を作る

日常生活の中で何らかの課題を解決する必要がある際，必ずしも指導や助言を受けることができるとは限らない。そのため，「教師の介入なしに」，参加者同士で課題を解決する機会を提供することが必要だと考えた。そこで，参加者同士が協力して課題を解決するために，例えば，グループセッションでは，担当教員はビデオ会議システムにアクセスはしているものの，音声とビデオをオフにした。そして，参加者からの問いかけがないかぎり，介入しないこととした。

4.2「論理的思考力」向上のための工夫

1) セッション内の段階を明示する

目の前の作業が全体を構成するうえで，どの段階にあたるのかを意識し，段階的に思考していくために，セッション内の段階を明示した。具体的には，「準備」→「目標設定」→「計画」→「情報収集」→「解決策の検討」→「制作」→「プレゼンテーション」→「振り返り」を枠組みとして，具体的な作業に落とし込んだスケジュール表を作成した。そして，このスケジュール表を配布し，参加者がいつでも確認できるようにした。また，その日の活動内容を説明する際に，活動が全体のどのあたりにあ

たるのかを PPT で目に見える形で提示し，確認してから作業を始めるようにした。これにより，参加者が全体像と各段階のつながりを意識することを期待した。

2) ポートフォリオを活用する

メッセージングアプリ（以下 slack）をポートフォリオとして使用した。slack 上では，タスクシートや資料の配布や提出物の受け渡しを行なった。slack 上にタスクシートや資料が蓄積されることにより，参加者本人がいつでも確認することができた。また，参加者同士がお互いのタスクシートや資料を確認できる状態であった。

これにより，教室内外で検討した内容が積み重なっていき，内容の前後関係，因果関係を意識することを期待した。

3) 一人作業・協働作業を繰り返す

一人作業・協働作業を繰り返すことは，「課題解決力」の向上のためにも取り入れた工夫であるが，「論理的思考力」の向上のためでもあった。

協働作業の際に，一人作業で得られた成果を他者に説明することにより，自分の考えを振り返ることにつながり，協働作業で他者とやりとりすることにより，論理的なつながりを意識することを期待した。

4.3 その他の工夫

1) 全員に共通する属性をキーワードとする

共通の問題意識を持ち，解決策をグループで考えてもらうために，参加者全員の共通点を意識してもらうこととした。そのキーワードを「Z 世代」とした。今回の参加者の属性は，出身（国・地域）や母語においては異なるが，年代が「Z 世代」であることは共通していたからである。「Z 世代」をキーワードとすることで，自分ごととして問題意識を深めることも期待した。

2) 時間的・距離的制約なくやりとりできる場を提供する

本研修では，タスクシートや資料の配布，提出を slack 上で行った。また，slack 上に，チャットルームを作成し，授業時間外でも，参加者同士がやりとりできる場を提供した。このことにより，授業時間外でも，参加者同士が，資料の共有や話し合いを行い，物理な距離は離れていても，心理的な距離を近づけ，連携して作業を進めることができることを期待した。

5. まとめと今後の課題

本研修の参加者には，一人作業と協働作業を行うなかで，社会問題を多角的に捉え，問題意識を深めていく様子が見られた。また，全員が初対面であり，海外在住であったが，活発に意見交換を行い，協力して作業に取り組む様子が見られた。これは，ICT を活用し資料を共有したり，時間的・距離的制約なくやりとりのできる場を提供したこと，教師が介入しない時間を作ったことで，参加者同士に連帯感が生まれた結果であると考えられる。さらに，今回の参加者は 4 名中 3 名の母語が共通していたが，

参加者同士が母語で話す様子はほとんど見られなかった。母語の異なり，日本語レベルの差はあったものの，翻訳アプリなどを活用することにより，やりとりが進められた。例えば，母語を日本語に翻訳するだけでなく，母語を他の参加者の母語に変換する様子が見られた。日本語以外の共通言語（例えば英語）もほとんど使われなかった。このことから，協働で課題に取り組むことで，参加者が意識的に日本語を運用しており，日本語を運用する必然性も生まれていたと考える。

一方で，課題も明らかとなった。オンライン授業では，段階的に活動を進め，活動の時間を均等に配分した。そのため，時間内に活動が終わらない場合には，次回に持ち越したり，宿題とすることとなった。このことから，段階に応じた活動時間を設定するなどスケジュールの修正が必要であると考える。また，授業では，必要に応じてフィードバックを行なったが，参加者から問いかけがないかぎり，語彙や表現の説明，文法的な誤りの修正は行わなかった。そのため，参加者からは，語彙や表現について学びたかった，修正の必要があれば指摘してほしかったとの声があった。このことから，活動の中に，言語面についてフィードバックを行う時間を設けることも検討する必要がある。さらに，ICT を活用することで，母語の異なりは活動の障害とならなかったものの，ICT の活用においてレベル差が見られた。ICT 活用の技術面への支援をどのように行うかも検討の余地がある。

今回は担当教員の視点から研修内容を報告した。一方で，研修をより発展させるためには，実際に研修参加者がどのような学びを得たのか，またどのような困難があったのか，調査・分析の必要がある。それらの分析をとおして，今後，オンライン環境での研修をどのように行うべきか検討したい。

注

(1) プロジェクト学習：鈴木（2012；p. 12）では，「学習者が自ら課題を発見し，目標を明確にし，情報を集め，課題を解決する手法」とされている。

(2) バディ：本学の国際交流・留学センターに国際交流活動への参加を希望し，登録している学生である。

(3) Z 世代：原田（2020；p. 3）では，共通した明確な定義はなく，アメリカを中心とした欧米諸国で，1990 年代中盤あるいは 2000 年代序盤以降に生まれた世代を指す言葉として作られ，ここ数年広く使われるようになった言葉であるとされている。

参考文献

鈴木敏恵（2012）『課題解決力と論理的思考力が身につく　プロジェクト学習の基本と手法』教育出版

西俣（深井）美由紀・熊谷由理・佐藤慎司・此枝恵子（著）（2016）『日本語で社会と繋がろう！社会参加をめざす日本語教育の活動集』ココ出版

原田曜平　（2020）『Z 世代　若者はなぜインスタ・TikTok にハマるのか？』光文社新書